

池田屋事件

経緯

幕末の京都は政局の中心地として、尊王攘夷・勤王などの各種政治思想を持つ諸藩の浪士が潜伏し、活動していた。会津藩と薩摩藩による「八月十八日の政変」で長州藩が失脚し、朝廷では公武合体派が主流となっていた。尊王攘夷派が勢力挽回を目論んでいたため、京都守護職は新選組を用いて、京都市内の警備や捜索を行わせた。

5月下旬ごろ、新選組諸士調役兼監察の山崎丞・島田魁らが、四条小橋上ル真町で炭薪商を経営する枡屋喜右衛門（古高俊太郎）の存在を突き止め、会津藩に報告。捜索によって、武器や長州藩との書簡などが発見された。古高を捕らえた新選組は、土方歳三の拷問により古高を自白させた。自白内容は、「祇園祭の前の風の強い日を狙って御所に火を放ち、その混乱に乗じて中川宮朝彦親王を幽閉、一橋慶喜・松平容保らを暗殺し、孝明天皇を長州へ動座させる（連れ去る）」というものであった。しかし、自白したのは自分の本名が古高俊太郎であることのみ、という説もあり、古高俊太郎について述べられた日誌には自白内容の記述がされていないことから自白は本名のみであった可能性が高い。

さらに、長州藩・土佐藩・肥後藩などの尊王派が、逮捕された古高奪回のための襲撃計画を実行するか否かを協議する会合が、池田屋あるいは四国屋において行われることを突き止めた。

影響

御所焼き討ちの計画を未然に防ぐことに成功した新選組の名は天下に轟いた。逆に尊攘派は、吉田稔麿・北添侁摩・宮部鼎蔵・大高又次郎・石川潤次郎・杉山松助・松田重助らの逸材が戦死し、大打撃を受ける（のちの新政府により彼らは俗に「殉難七士」と呼ばれる）。落命した志士たちは、三条大橋東の三縁寺に運ばれて葬られた。

長州藩は、この事件をきっかけに激高した強硬派に引きずられる形で拳兵・上洛し、7月19日（8月20日）に禁門の変を引き起こした。

「[ウイキペディア](#)」より